作文における朗詠

後藤 昭雄

はじめに

平安朝盛期の撰関時代、朗詠は貴族社会に流布していた。よく知られているのは仮名文学に書き記されたものであろう。『枕草子』の「御仏名のまたの日」の段の後半にその一齣が記されている。

雨いたう降りて、つれづれなりとて、殿上人、上の御局に召して、御遊びあり。道方の少納言琵琶、いとめでたし。^{たひまき}濟政等の琴、行義笛、経房の中将笙の笛など、おもしろし。ひとわり遊びて、琵琶弾きやみたるほどに、大納言殿、「琵琶声やんで物語りせむとすること遅し」と誦^ずしたまへりしに、……

とある。殿上人たちを招いて管絃の遊びが行われているが、

終わりに近づき、源道方が琵琶を弾き終えると、「大納言」、藤原伊周が「琵琶声やんで……」と詠じた。それは白居易の「琵琶引」(『白氏文集』卷十二・602)⁽²⁾の一句「琵琶声停^やんで語らんと欲して遅し」であった。伊周はその場にふさわしい詩句としてこれを詠じている。

また、この時代多く出現する公家日記にもその記事が散見する。『政事要略』⁽³⁾卷二十四所引の「吏部記」(吏部王記)延長四年(九二六)九月九日、菊花宴の記事に、

右中将朝臣(源英明)の詩に佳句有り。……次いで散三位亦^{また}佳句有りて坏(杯)を勧む。麗句有る毎に(藤原)博文をして咏せしむ。御製に到りて、群臣盛んに発して共に朗詠す。

とある。ここではその詩宴で詠まれた秀句、また御製(醍醐天皇)が詠誦されている。

後に見るように平安朝ではさまざまな場で詩句の朗詠がなされているが、その一つに詩宴があった。それはどのようなものであったか。平安朝詩文研究の視点から、その様相を考えてみたい。

—

平安時代の作文さくぶんにおける朗詠の事例を検討する。ただし、その詩句まで知られる場合は意外に少ない。時代を追って見ていこう。

1 『御堂関白記』寛弘四年（一〇〇七）九月十七日条の記事は次のとおりである。⁽⁴⁾

作文。題秋鴈数行書。

これだけである。まことに素っ気ないが、この日、藤原道長が土御門第に詩宴を催し、「秋雁は数行の書（飛んで行く雁の群はまるで大空に書いた数行の書だ）」の題で人々が詩を賦したことが知られるが、この場では朗詠が行われている。それを記述しているのは『江談抄』である。二条があるが、

まず巻四一九に、⁽⁵⁾

雲衣は范叔が羈中の贈、風櫓は瀟湘の浪上の舟。賓鴻は

是れ故人。同人の作

古人云はく、「范叔と瀟湘はいはゆる双声側対なり。蕭相をもつて范叔に対するか」と云々。また云はく、「秋雁は数行の書」の詩を作る時、以言・匡衡ともに「この句を詠ず」と云々。

とある。詩句に付された作者注の「同人」とは一つ前の第八條を承けて「後中書王」、具平親王をいう。この一聯について、二つのことが語られているが、後半に、前述の道長郎詩宴において、大江以言と同匡衡が共にこの句を朗詠したとい⁽⁶⁾う。具平親王が「賓鴻は是れ故人」の題で詩を賦した場、状況は未詳であるが、「賓鴻」は雁をいう。道長郎での作文会で、以言と匡衡とは同じく雁を詠んだ秀句として共にこの一聯を朗唱したのである。

この句は次のように詠む。

雁が着ているように見える雲は范叔が旅の途中で須買から贈られた衣のようで、風の中に聞こえる櫓の音に似た雁の鳴き声は瀟湘の波の上で屈原に声をかけた漁夫の舟が立てているかと思われる。

具平親王のこの一聯はのち『和漢朗詠集』（巻上・雁⁽⁷⁾）

に採録されることになる。

もう一つは卷四一八六である。

山腰の帰雁は斜めに帯を牽く、水面の新虹は未だ巾を展べず。

後入道殿において「秋雁数行の書」の詩を賦せらる。

匡衡・以言の二人、終夜ならびにこの句を詠すと云々。群書類従本には「春日閑居、都在中」の詩題、作者名が注記されている。『和漢朗詠集』（帰雁25）に入集する。前述の卷四の九と同趣旨の話であるが、本話は「秋雁」の題が課された作文で、春の「帰雁」の詩句を詠じたことになり矛盾する。この点に疑問が残る。

2 次いで、寛治六年（一〇九二）三月二十八日の吉祥院聖廟作文会である。藤原宗忠の『中右記』の当日条に詳しい記述がある。必要な箇所を書き下して引用する。

今日吉祥院聖廟（廟）作文有り。是れ寺僧夢想の告げ有るに依るなり。予心中に願有るに依りて、源少納言成宗と共に具へ了る由を申す。仍て文士を相率めて廟堂に参仕す。菅家の長者大学頭是綱、事共を進めしめ、詩題を書きて机上に進め置く。則ち之れを取りに覧す（今日、座の貫首為り）。題に云ふ「桜

花古社に残る。春を以つて韻と為す」てへり（割注略）。

次いで氏長者大学頭是綱朝臣（今日儒者の貫首為り）、序を作るべきの由を仰す。一々覽了りて之れを下す。乗燭に及ぶ程、一々文台に就いて詩を献す（割注略）。次

いで散位大江通国を召して講師と為し、是綱朝臣を読師と為し、次第に講じ了んぬ。夜深更に及んで詩を講ぜんと欲するに俄に天陰り雨下る。神明自づから感応有るか。

講席了る後も雨脚頻りに下る。已に帰与の思ひ無し。此の間、遙かに朗詠す。或いは「管絃の長曲に在る」の句、或いは「象魏を指して轅を北にす」の句等なり。時に鐘声頻りに報じ、夜三半に及びて雨脚暫く止む。人々各おの帰洛す。

吉祥院は菅原氏の氏寺である。その始まりについてはいくつかの説があるが、この詩宴の序、藤原敦基の「暮春、吉祥院聖廟に陪り同に「桜花古社に残る」を賦す」序（『本朝続文粹』卷八）には次のようにいう。

都城の南に一廟宇有り。草創を尋ぬるに、則ち承和の左馮翊、聖教に帰し以つて精舎を建てて花飭を調へ、亦昌泰の右僕射、祖跡を重んじて以つて靈祠を崇ぶ。

「承和の左馮翊」は左京大夫菅原清公を、「昌泰の右僕射」は

右大臣道真をいう。これによれば吉祥院は道真の祖父清公によつて建てられたことになる。『扶桑略記』治暦二年（一〇六六）三月二十八日条に「吉祥院に新たに天神堂を造り、尊廟を移し奉る」とあり、これにより聖廟となる。吉祥院天満宮（京都市南区吉祥院政所町）として現存する。

この詩宴では披講の間に朗詠が行われている。明記されている詩句は「管絃之在長曲」と「指象魏而北轅」の二句であるが、前者「管絃の長曲に在る」は菅原道真の「早春内宴、仁寿殿に侍り同に「春娃氣力無し」を賦す」序（『菅家文章』巻二・148）の一聯、

羅綺之為重衣、妬無情於機婦、

羅綺の重衣為る、情無きを機婦に妬み、

管絃之在長曲、怒不闕於伶人。

管絃の長曲に在る、闕まざるを伶人に怒る。

の一句である。この一聯は『和漢朗詠集』巻下・管絃（466）に採録される。

この序は『菅家文章』における配列から元慶九年（仁和元年、八八五）正月の作と考えられるが、『三代実録』同二十一日条には「仁寿殿に於いて近臣に内宴あり。内教坊女楽を奏す。近臣の外、文人の席に預る者五六人詩を賦す」とあり、

宴では女楽が奏されている。句題「春娃無氣力」はこれに即して選ばれたものである。「娃」は美女をいう。

この一聯は題に従って、艶やかに舞う妓女の姿を描写した個所で、

（舞姫は）薄絹の衣装さえ重たいと、思いやりのないことだと衣を織った女を怨めしく思い、音楽がいつまでも続くと、演奏を止めないことで楽人に腹を立てている。

と詠む。この句が詠じられたのは道真の作であることによる。もう一つの「象魏を指して轅を北にす」は大江以言の「三月尽日、吉祥院聖廟に陪り同に「古廟春方に暮る」を賦す」序（『本朝麗藻』巻下・82）の一聯、

春夜欲明、望牛漢之西轅、

春夜明けんと欲て、牛漢の西に転ずるを望み、

夏日告朔、指象魏而北轅。

夏日朔を告げ、象魏を指して轅を北にす。

の一句である。この一聯は『新撰朗詠集』巻上・春夜（24）に採録される。

この詩宴が催された事情は序に述べられている。長保元年（九九九）閏三月の末、菅家七代目の「吏部大卿相公」、参議式部大輔輔正は五日の休暇を得て、所縁の深い吉祥院で去り

行く春を惜しむこととした。これに応じて「貫首の弟子、大長秋納言」、中納言太皇太后宮大夫藤原実資を初めとして教えを受けた人が会したという。

右の一聯は、集った人々に詩の詠作を促す場面である。

「今衆賢に命じて各おの一絶を賦せしむ」とあって、この聯に続く。「牛漢」は天の川、「象魏」は宮城の高い門をいう。

春の終わりの夜も明けようとして、天の川が西に動いて

いるのを見上げる。夏の初日となり、(休暇も終わつ

て) 朝廷へ出仕するために、車を北へ向かわせる。

という。

「象魏を指して轅を北にす」の典故は右のとおりであるが、これによって、この句がこの作文会で朗詠された理由は明らかになる。吉祥院という場を同じくすることは言うまでもないが、さらに春の終わりという時もまた重なるのである。すなわち場と時とにふさわしい句が選ばれていることになる。

3 大治五年(一一三〇)九月十七日、鳥羽上皇は院の文殿に作文会を催した。『中右記』および源師時『長秋記』にその記事があるので、併せてその要点を記す。『長秋記』¹⁵⁾にいう。

別当書を送りて云はく、今夜、文殿の作文有るべし。而

して御前に於いて講ぜらるべしてへり。……。対の東廂の御簾中に上皇御し、広庇の障子の外に関白並びに内府候せらる。……。講師有業笏を取りて参候す。中宮大夫読師^{たり}為り、時登朝^{ときあがり}臣序者^{しよしや}為り。講畢りて人々分散せんと欲す。而るに大納言召し留めて朗詠せしむ。式部大輔初めに「令月」の句並びに「公は春秋に富む」の句を出し、右兵衛督又出す。中宮大夫「嚴粧す金屋の中」を詠す。此の後退出す。

中宮大夫また大納言は藤原宗忠、式部大輔は藤原敦光である。『中右記』は、

申刻許、別当消息を送りて云はく、月明勝地中^{光字}、今夕院の文殿の作文なり。……。此の題は敦光朝臣之れを献ず。……。有業を召して講師と為す、衣冠に笏を持つ。詩四十余枚、殿上人七八人なり。上達部は予、別当、宰相師時、伊通なり。予当座の上臈^{じやう}為るに依りて読師を勤む。夜半講了んぬ。敦光朝臣朗詠一両度。

と記す。すなわち、鳥羽院はもとより関白(藤原忠通)、内府(源有仁)も臨席した。題は藤原敦光が献じた「月は明らかなり勝地の中」であった。講師は藤原有業、読師は藤原宗忠、序者は菅原時登が勤めた。なお、宗忠はこのときの自作

の詩を『中右記』に書き留めている。

この詩宴でも朗詠が行われている。『長秋記』の傍線部である。『中右記』は「敦光朝臣朗詠一兩度」と記すのみである。ここでは「令月」、「公富春秋」、「嚴粧金屋中」が詠唱されている。

「令月」は『和漢朗詠集』巻下・祝に引く謝偃の「雜言詩」、

773 嘉辰令月歛無極、万歳千秋樂未央。

である。

「公富春秋」は菅原道真の昌泰三年（九〇〇）の「九日後朝、同に「秋思」を賦す。制に応ふ」（『菅家後集』473¹⁶）の第

三聯、

君富春秋臣漸老、君は春秋に富み臣は漸く老ゆ、

恩無涯岸報猶遲。恩は涯岸無く報ゆることなほ遅し。

である。「君」を『長秋記』では「公」と表記している。君は醍醐天皇をいう。時に十六歳、道真は五十六歳である。後句の「涯岸」はかぎり。限りない恩恵を賜っていないながら、いかにしてもこれに報いてはいないという。この句は『和漢朗詠集』にも『新撰朗詠集』にも採録しない。

「嚴粧金屋中」は『和漢朗詠集』巻下・暁の謝観「暁賦」

の

418 嚴粧金屋之中、青蛾正画、

嚴粧金屋の中、青蛾正に画き、

罷宴瓊筵の上、紅燭空余。

はいえけいせん
罷宴瓊筵の上、紅燭空しく余れり。

である。前句の「嚴粧」は身づくろいをすること、「青蛾」は青く描いた眉。後宮の女たちの朝の身支度と、夜を徹しての宴席が果てた後の余韻を描写する。

4 天承元年（一一三一）三月二十二日、大納言藤原宗忠は白川の山荘に尚齒会を主宰した。『長秋記』に詳細な記事があるが、また『古今著聞集』巻四一一二にその系譜と共に簡潔に記述されているので、ここではこれに依る。

尚齒会は唐の会昌五年三月二十一日、白樂天、履道坊にして、はじめて行ひ給ひける。我が朝には貞観十九年三月十八日、大納言年名卿、小野の山荘にてはじめて行はれけり。また安和二年三月十三日、大納言在衡卿、粟田口の山荘にて行はれける。その後、天承元年三月二十一日、大納言宗忠卿、白河の山荘にして行はれけり。

ここにいうように、尚齒会はもと中国で創始された行事で、これを我が国に将来したものである。白居易が八四五年に洛陽の履道里の邸宅で主宰したことに始まる。この時の詩

が『白氏文集』巻七十一(30)に収められているが、長い詩題と後注が事情をよく説明している。詩題にいう。

胡・吉・鄭・劉・盧・張等の六賢、皆年寿多し。予また焉に次ぐ。偶たま弊居に於いて尚齒の会を合成す。七老相顧み、既に酔ひて甚だ歎ぶ。静かにして之れを思ふに、此の会有ること稀なり。因りて七言六韻を成して以つて之れを紀し、好事の者に伝ふ。

「尚齒」とは「齒」を「尚ぶ」こと、敬老の意である。胡杲(年八十九)、吉皎(八十六)、鄭樾(八十四)、劉真(八十二)、盧貞(八十二)、張渾(七十四)、白居易(七十)の七人が会して、饗宴を張り、長寿を自祝し、詩を賦した。

この行事は我が国にもたらされ、展開を見せる。右の引用にいうように、貞観十九年(八七七)三月に南淵年名が主宰して開いたのが最初で、次いで、安和二年(九六九)三月、藤原在衡が催した。

三度目の尚齒会が藤原宗忠主宰の天承元年の会である。『古今著聞集』に先の引用に続いて次のように語る。

その後、天承元年三月二十二日、大納言宗忠卿、白河の山庄にして行はれけり。七叟の算、三善為康年八十三、前

左衛門佐藤原基俊七十六、前日向守中原広俊七十、亭主七十、式部大輔藤原敦光朝臣六十九、右大弁実光六十三、式部少輔菅原時登六十二。この中に、基俊は病によりて詩ばかりを送りけり。時登、序をば書きたりけり。垣下に中納言師時以下侍りけり。詩披講以前に朗詠、「楽天より少きこと三年」の句を、なべて四五反に及ぶ。右大弁、式部大輔ぞ詠じける。また「岸風に力を論ずれば」の句、「蓬鬢商山」の句、「酔ひて花に対す」の句等、再三詠じて、すでに幽興に入りけり。

この会においては朗詠がなされている。ア「楽天より少きこと三年」、イ「岸風に力を論ずれば」、ウ「蓬鬢商山」、エ「酔ひて花に対す」が繰り返して詠じられたという。一句ずつ確かめていこう。

ア「楽天より少きこと三年」。これは安和二年の尚齒会における菅原文時の「暮春藤原相山庄尚齒会詩」序(『本朝文粹』巻九・246)の一聯、

少於楽天三年、猶已衰之齡也、

楽天より少きこと三年、なほ己に衰ふる齡なり、

遊於勝地一日、非是老之幸哉。

勝地に遊ぶこと一日、是れ老の幸ひに非ずや。

で、『和漢朗詠集』巻下・老人(726)に採録される。前句「楽天」は白居易。彼が尚歯会を催した時は、七十四歳。文時は安和二年には七十一歳であるから、かくいう。イ「岸風に力を論ずれば」。前句と同じ尚歯会での文時の詩の一聯、

林霧校声鶯不老、林霧に声を校ぶれば鶯は老いず、

岸風論力柳猶強。岸風に力を論ずれば柳はなほ強し。

である。

霧の立ちこめた林で鳴く鶯と声を比べると、鶯は私ほど老いてはいない、岸辺を吹く風にゆれる柳と力を論じてみると、柳の方がなお強い。

と詠む。これも『和漢朗詠集』老人に入る(729)。

ウ「蓬鬢商山」。徳川美術館蔵『尚歯会詩』(後述)所収、菅原雅規の安和二年尚歯会における詠詩の第二聯、

蓬鬢商山前日雪、蓬鬢商山前日の雪、

華茵履道昔春風。華茵履道昔春の風。

である。⁽¹⁸⁾前句、「蓬鬢」はよもぎのように乱れた鬢の毛。「商山」は秦末の乱世を避けて東園公ら四人の老人が隠れ棲んだ長安近郊の山。「華茵」は美しい敷物。謝靈運「魏の太子の鄴中集の詩に擬す八首、魏太子」(『文選』巻三十)に「澄觴金

疊に満ち、連榻華茵を設く」とある。「履道」は白居易が尚歯会を催した履道里。

商山に隠れ住んだざんばら髪の人々、いにしえの彼らと同じく頭に雪を頂く人々、美しい敷物が設けられた履道での宴、昔と同じように吹く春の風。

という意であろう。

この句は両朗詠集に入集していない。

エ「酔ひて花に対す」。前句と同じ菅原雅規の尚歯会詩の第

四聯、

酔対落花心自静、酔ひて落花に対へば心自づから静かなり、

眠思餘算涙先紅。眠りて餘算を思へば涙先づ紅なり。

である。後句の「餘算」は残された命。この一聯は『和漢朗詠集』巻下・老人(730)に入る。

このように天承の尚歯会では朗詠がなされているが、その詩句を確かめてみると、いずれもこれに先立つ安和の尚歯会で制作された詩文である。これに関連して、前記の『尚歯会詩』について述べておきたい。

安和二年の尚歯会で詠作された詩を収載した文献として従来知られていたのは『粟田左府尚歯会詩』(群書類従巻一三

四)であつたが、この詩集に収められた詩はすべて「藤重相山莊尚齒会を見る」と題された垣下(陪席者)の作であつて、尚齒会の当事者たる七人の老人(七叟)の詩ではなかつた。

我が国で行われた尚齒会は、七人の老人が会する、三月に行う、七言六韻詩を賦すなど、白居易主宰の会の方法を忠実に守つたのであるが、ひとつ独自の展開があつた。それは尚齒会に陪席する者たちがあり、彼らも(尚齒会を見る)という立場で詩を詠んだのである。『栗田左府尚齒会詩』はこの「垣下」の詩をまとめた集であり、七叟の詩は不明であつた。それが近年、七叟の詩の存在が明らかになつた。徳川美術館蔵『尚齒会詩』である。これによつて安和二年尚齒会の七叟の名も明らかになつた。¹⁹⁾

5 長承二年(一一三三)四月二十八日、作文会が北野で行われた。菅原道真を祀る北野聖廟である。これも『中右記』また『長秋記』に記事がある。次のとおりである。

今日北野に作文有り。是れ陰陽頭家榮朝臣の往年の夢想と云々。序者は大納言師頼卿、件の夢想に依るなり。題に云ふ「野は唯青草を催す(心字)」。時登朝臣の題なり。

上達部は左大弁実光、右大弁師俊、君達は行宗、公章、宗成、公能朝臣等なり。師能、師教、儒者皆参る。先づ

拝礼す。講師は永範、読師は左大弁実光なり。深更に事了り、人々退出すと云々。(『中右記』)

北野に作文有り。題は「野徑は唯青草(心)」。参れる公卿は源大納言、陰陽頭家榮朝臣の夢に依りて序を作らる。左大弁、右大弁、式部大輔敦光以下文人二十一人なり。

題は昔時登朝臣。(『長秋記』)

両者を合わせて要点を摘むと次のようになる。この日の作文は陰陽頭賀茂家榮の夢想に依つて開かれた。題は「野徑は唯青草」で(『中右記』の「催」は誤り)、菅原時登が選定した。詩序はこれも家榮の夢想により権大納言源師頼が作つた。参会者は藤原実光(読師)、藤原永範(講師)ほか「二十一人」があつたというが、名が記されたなかでは具平親王の血を承ける村上源氏の参加が目立つ。師俊は師頼の兄弟で、師能・師教は師頼の子である。ちなみに『長秋記』の著者師時は師頼の弟である。これら村上源氏が才学に秀でていたことは『今鏡』巻七「むらかみの源氏」に言及があるが、その『今鏡』巻六「ふちなみの下」にこの北野作文のことが次のように述べられている。²⁰⁾

徳大寺の大臣(藤原実能)の御子は右大臣公能の大臣と申しき。……むねとは詩作り給ふ事を好みて、中将な

どきこえ給ひし時、北野の、人の夢に、「久しくこそ詩など講ずる人なけれ」とのたまはずとて、「野の徑みちはただ青き草」とかいふ詩を博士、学生などあまた詣でて講じけるに、……。次第に朗詠し給へるの中に、はなやかなる御声して、「羅綺の重衣たる」とうち出でて給へりける。

この作文で藤原公能が朗詠を行ったという。その句は「羅綺の重衣たる」であったというが、これは前述の2吉祥院聖廟作文会で朗詠された「羅綺の重衣為る、情無きを機婦に妬み、管絃の長曲に在る、関ままざるを伶人に怒る」である。同じ一聯をこれは前句の措辞で称している。これはそこで述べたように菅原道真の詩序からの摘句であった。

6 治承二年（一一七八）六月十七日、高倉天皇は中殿（清凉殿）に作文会を催した。『山槐記』『玉葉』に詳細な記事があり、『古今著聞集』（巻四―四三）にもそのことを語る。太政大臣藤原師長以下十五名が召され、式部大輔藤原永範が選んだ「禁庭に勝遊を催す」の題で詩を賦したが、御製に関して三書ともが特記していることがある。ここでは「古今著聞集」に依る。

その後、太政大臣、御製を給はりて文台の上に開かれければ、式部大輔ぞ講じたてまつりける。

禁庭月下勝遊成 禁庭の月下勝遊成る

有管有絃有頌声 管有り絃有り頌声有り

宴席愁なほ追延久跡 宴席愁なほひに延久の跡を追ふも

詞花猶異昔風情 詞花なほ昔の風情に異なる

発句の下七字、中宮大夫の詩に合ひて侍りければ、大夫おどろきさわぐ気色あり。人々感じけるとぞ。大臣、御製をとりに懷中に入れ給ひけり。延久に土御門の右府はかくもし給はざりけるに、いと興ありとぞのしりける。座に帰り居給ひて後、数反詠じ給ひけり。まことに道にたへたる御事もあらはれて、めでたくぞ侍りける。左大將、左大弁も同じく詠じけり。その後、「令月」「德是」なども詠じ給ひけり。

第3句にいう「延久の跡」は延久三年（一〇七二）十二月六日、後三条天皇が行った中殿の詩宴をいう。「土御門の右府」は源師房、「左大將」は藤原実定、「左大弁」は同俊経である。この話柄の要点は、天皇の詩の「発句の下七字」―「管有り絃有り頌声有り」が「中宮大夫」、藤原隆季の措辞とそっくり同じで、人々を驚嘆させたということである。ために師長はくり返し詠じ、実定、俊経もまた詠吟したという。

この後、付けたしのごとく、「令月」「德是」が詠じられた

ことが述べられている。二句のうち、「令月」は3鳥羽院文
殿の宴においても朗唱されていた。

「徳是」は朱雀朝の承平二年（九三二）正月二十一日に行
われた内宴（『日本紀略』）に際して大江朝綱が書いた「早春
内宴に侍り「聖化万年の春」を賦す」詩序（『本朝文粹』卷
九・234）中の句である。

徳是北辰、椿葉之影再改、

徳は是れ北辰、椿葉の影再び改まり、

尊猶南面、松花之色十廻。

尊はなほ南面、松花の色十たび廻る。

とある。「徳は是れ北辰」は『論語』為政の「子曰はく、政
を為すに徳を以つてすれば、譬へば北辰の其の所に居て、衆
星の之れに共かふが如し」を踏まえる。「北辰」は北極星。
対句をなす「尊は猶南面」の「尊」は尊貴の位。帝王は「南
面する」（『易』説卦伝）。下句の「椿葉」「松花」は共に永久
の命を有する木。この一聯は有徳の帝王の治世と寿命の永遠
を言祝ぐ。『新撰朗詠集』（卷下・帝王615）に入る。

この作文では天皇の秀句と「令月」「徳辰」の二首が朗詠
されている。

上述の諸例のように朗唱された詩句は明示されていないが、

朗詠が行われている文事がある。併せて考えていこう。

それは勸学会である。どのような行事であったのか、それ
を述べたものとして、源為憲が尊子内親王のために執筆した
仏教入門書『三宝絵』の記述を借用する。卷下「比叡坂本勸
学会」にこのように説く。

村上ノ御代、康保ノ初ノ年、大学ノ北ノ堂ノ学生ノ中ニ、
心ザシヲオナジクシ、マジラヒラムスベル人アヒカタラ
ヒテ云、「人ノ世ニアル事、ヒマラスグル駒ノゴトシ。

我等タトヒ窓ノ中ニ雪ヲバ聚トモ、且ハ門ノ外ニ煙ヲ遁
ム。願ハ僧ト契ラムスビテ、寺ニマウデ会ヲ行ハム。ク

レノ春、スエノ秋ノ望ヲソノ日ニ定テ、経ヲ講ジ仏ヲ念
ズル事ヲ其勤トセム。コノ世、後ノ世ニ、ナガキ友トシ
テ、法ノ道、文ノ道ヲタガヒニアヒススメナラハム」ト
云テ、始行ヘル事ヲ勸学会ト名ヅクルナリ。

勸学会の基本的性格が要領よくまとめられているが、さら
に少し補いつつ要点を箇条書きにすると、次のようになる。

・村上朝の康保元年（九六四）に創始された。

・大学寮の文章院の学生と比叡山の僧侶とが結縁して行う法

会である。

・三月と九月の十五日を期日とする。

・經典の講義と念仏を勤めとし、互いに仏道と詩文の制作を学ぶことを目的とする。

一、二補うと、「結衆」と呼ばれる参加者は学生、僧侶それぞれ二十人で、会場は当初は延暦寺の結界の西限、西坂本の、現在の曼殊院近くの寺が用いられた。經典の講義のあとには『法華經』の一句を題として結衆は詩を詠作した。勸学会は作文の場でもあった。

勸学会とはこのような仏事、文事の融合体であったが、以後、途中、二度の廃絶を挟みながらも、平安朝末期の保安三年（一一二二）まで行われていたことが確認できる。⁽²²⁾

勸学会では特徴的なこととして、毎回、会の記録「勸学会記」が執筆されるのが例であったが、その二篇が現存している。一つは近年、見出されて注目を集めた、勸学会が始まった康保元年九月（十一月ともいう）の記で、もう一つは古く『朝野群載』（巻三）収載の延久二年（一〇七〇）の「勸学会之記」であるが、それぞれに朗詠がなされたことが記されている。

康保の「記」では、学生等が会場の親林寺に到着したことを記した後に、「詩一句を誦し、酒三盃を傾く。同じ火鑪に就きて聯句有り」とある。延久の「記」⁽²⁴⁾には仏事が終わった

後、作文に移ることを述べて、

事畢りて僧侶題目を示して云はく「常説清浄法なり」と。
「五百弟子授記品」の一偈なり。各おの以つて韻を採る。
江秀才を以つて序者と為す。此の間、例に依つて聯句朗詠あり。

とある。注目されるのは「例に依つて」とあることである。この頃、勸学会においては朗詠を行うことが慣例となつていたことをもの語る。

このように勸学会においても朗詠がなされているが、その詩句が明らかでないのはまことに残念である。ただし創始から約百年を経た延久の会についてはそれを推定することができる。これまで見てきた例から、それはその作文に関連のある詩句であろうと推測される。そうすると、それは『和漢朗詠集』（巻下、仏事）、『新撰朗詠集』（同）に収載される、勸学会で賦された諸作が最も可能性の高いものである。このような詩句である（二例に止める）。『和漢朗詠集』所収、

597以仏神通争酌尽

仏神通を以つても争か酌み尽くさん 弘誓深きこと海の如し

経僧祇劫欲朝宗

僧祇劫を経るも朝宗せんと欲す 以言

598 叩凍負来寒谷月

凍こおりを叩たたきて負おひ来きたる寒谷こおりの月 葉を採りて水を汲む、勸学舎

払霜拾尽暮山雲

霜しもを払はひて拾ひろひ尽つく暮山くしの雲 保胤

なお、前者、康保の会では「詩一句を誦し」とあるが、これが初回であることから尚齒会以外に求めなければならぬが、一つの憶測を廻らすことはできる。先述の『三宝絵』に会の前日、十四日の夕に天台僧と学生がそれぞれ寺に向かうことを記しているが、そこに、

俗八月ニ乗テ寺ニユク。道ノ間ニ声ヲ同ジクシテ居易ノ作レル「百千万劫ノ菩提ノ種、八十三年ノ功德ノ林」ト

イフ偈ヲ誦シテアユミユクニ……

とある。ここには「偈」と記すが、これは白居易「僧に贈る五首」のうちの「鉢塔院の如大師」と題する詩（『白氏文集』巻五十七・204）の首聯である（『和漢朗詠集』に入る）。589）。また十五日の朝には「此身何足愛、万劫煩惱ノ根、此身何足厭、一聚虚空ノ塵トイヘル詩ナドヲ誦スル」とある。

これは白居易の「逍遙詠」（『白氏文集』巻十一・577）の第二・三句である。あるいはこれらか。

二

平安朝において作文の場で朗詠が行われ、その詩句が明らかであるのは、上述の六例である。その要点を整理すると、次のようになる。

1 寛弘四年（一〇〇七）九月、藤原道長邸で「秋雁數行書」の題で詩宴が行われ、大江匡衡、同以言の二人が、具平親王が「賓鴻は是れ故人」の題で詠んだ「雲衣は范叔が鞅中の贈、風櫓は瀟湘の浪上の舟」を朗誦した。これは詩宴の題（雁）に合わせて同じく雁を詠じた詩句を詠じている。

2 寛治六年（一〇九二）三月、吉祥院の作文で、菅原道真が「春娃氣力無し」の題で詠んだ「管絃の長曲に在る」、および大江以言が吉祥院で詠んだ「象魏を指して轅を北にす」が朗誦された。これは吉祥院が菅原道真を祭る聖廟であることから、道真の詩句、および同じ吉祥院で賦された詩句を詠じている。

3 大治五年（一一三〇）九月、鳥羽院で上皇の主宰で作文会が催された。ここでは次の三句が朗誦された。謝偃の「嘉辰令月」、菅原道真の「公（君）は春秋に富む」、謝観の「嚴粧

す金屋の中」。この三句については、なぜこれらが詠じられたのか、主宰者、場、詩題などとの関連を見出し難い。なお後述。

4 天承元年（一一三二）三月、藤原宗忠主宰の尚歯会が行われた。ここでは四句が朗誦されている。菅原文時の「楽天より少きこと三年」と「岸風に力を論ずれば」、菅原雅規の「蓬鬢商山」と「酔ひて花に對す」であるが、いずれも前回、安和の尚歯会で詠まれた詩また詩序の摘句である。

5 長承二年（一一三三）四月、北野聖廟で詩宴が行われ、「羅綺の長衣たる」の句が朗誦された。これは菅原道真の作である（2の「管絃の長曲に在る」と一聯をなす）が、いまでもなく、道真を祀る北野聖廟にちなんでのことである。

6 治承二年（一一七八）六月、高倉天皇の主宰で中殿に作文会が行われ、「禁庭に勝遊を催す」の題で詠まれた御製の秀句と「嘉辰令月」「徳是北辰」が朗誦されているが、後者の二句には会との特別の関わりは見出せない。

以上のとおりであるが、朗詠が行われたこれらの作文は、その性格から二つに分かれる。一つは1・3・6で、これは主宰者の意思によって発案された催しであり、その会のみで終わる一回性の場である。それに対して2吉祥院作文、4尚

歯会、5北野作文は文事として恒常性を有している。

『朝野群載』卷十三に「書詩体」という項目がある。作文会の主宰者（天皇、親王など）、その性格、あるいは場によって、詩題、位置をどのように書くべきかを例示するものがあるが、作文の場として挙げるのは「北野・吉祥院、釈奠、文章院、御書所、勸学会、省試并放鳥試、読書（読書初め）」である。これらは平安朝において定期的あるいは恒常的に作文が行われていた場と見ることができるが、これに北野、吉祥院、また付言した勸学会が含まれている。なお、尚歯会は含まれていない。これは平安朝を通して三度しか行われていないので恒常的とは言えないからであるが、一つの文学伝統として、後述する和歌の尚歯会を導くものとなる。

このような定例化した作文においては、その行事に何らかの点で関連する詩句が朗誦されている。このことから、勸学会においても、先に推測したように、先立つ会で作られた詩文の摘句が詠じられた蓋然性は高いのではなからうか。

このことに関連して、先に述べた尚歯会について付け加えておきたいことがある。

先には平安朝において行われた尚歯会は三度と述べた。本稿は「作文」すなわち賦詩の場を対象としているので、こう

なるのであるが、尚歯会は和歌の世界へも浸透していくのである。次のとおりである。

嘉保二年（一〇九五）三月、主宰者、会場ともに未詳。冷泉家時雨亭文庫蔵『尚歯会和歌』に「暮春尚歯会和歌」として九首を収載する⁽²⁵⁾。

承安二年（一一七二）三月、藤原清輔が中心となり、白河宝莊厳院で行われた。『暮春白河尚歯会和歌』がその記録である。

養和二年（一一八二）三月、賀茂重保の主宰で、会場は未詳。『古今著聞集』巻五・205「賀茂神主重保尚歯会を行ふ事」に記述があり、『月詣和歌集』に三首を引く。

このように尚歯会は作文に加えて和歌の会も三度行われている。漢から和へと拡大していったのである。

このうち、承安二年の『暮春白河尚歯会和歌』は単行の文献として「群書類従」にも収められ、和歌尚歯会についての代表的な文献であるが、次のような内容である⁽²⁶⁾。

1 「暮春白河尚歯会和歌并せて序」藤原清輔の序を付して七叟の和歌

2 「暮春尚歯会を見る和歌」垣下の和歌九首

3 仮名の長文の記

4 翌日の性阿と清輔の贈答歌二首

3の「記」はこの日の次第を詳しく記述するが、次のような場面がある。七人の老人たちが介添えに助けられながら池辺に敷かれた円座に着座し和歌を詠む。これに続く本文である。

とばかりありて清輔誦ずらく、

ア かぞふればとまらぬものをとしといひてことしはいたく老いぞしにける

又誦ず、

イ おいぬとてなどか我が身をせめぎけん老いはずはけふにあはましものか

宮内のかみ、又敦頼の主こゑをたすく、たびたびのち、敦頼の主誦じて、

ウ おおしてるやなにはのみつにやくしほのからくもわれはおいにけるかな

また宮内のかみ誦ず、

エ かがみやまいざたちより見てゆかむとしへぬるみは老いやしぬると

また清輔誦ず、

オ おいらくのこんとしりせば門さしてなしたこたへてあ

はざらましを

いづれをも人人あひともに誦す。

藤原清輔、宮内のかみ（藤原永範）、藤原敦頼の三人が主唱し、皆が唱和して歌を詠じるが、三人はこの時の七叟である。そうしてここで誦されている歌はいずれも『古今和歌集』歌で、歌番号、詞書、作者は次のとおりである。

ア 893 題知らず 読み人知らず
イ 903 同じ(寛平)御時の殿上の侍にて、男どもに大御酒賜ひて、大御遊びありけるついでに仕う奉れる

藤原敏行

ウ 894 題知らず 読み人知らず
エ 899 題知らず 読み人知らず
オ 895 題知らず 読み人知らず
いづれも巻十七、雑歌に収められている(老い)を詠んだ歌である。

このように白河和歌尚歯会では吟詠が行われ、老いを詠んだ古今集歌が詠唱されているが、これは先に見た、天承の尚歯会において先立つ安和の尚歯会で賦された詩文の摘句が朗詠された先例に倣ったものに違いない。

詩と和歌との違いはあるものの、この古今集歌の詠唱は、

尚歯会においてはこれに深く関わる詩歌の朗詠が定例となっていたことを思わせる。

三

前節で第一節で取り挙げた作文における朗詠の要点を整理したが、3鳥羽上皇文殿作文と6高倉天皇中殿作文については、その場と朗詠句との間には特に関連性は見出せないと思えた。ここでその朗詠句について考えてみたい。前者の「嘉辰令月」「嚴粧金屋中」および後者の「德是北辰」であるが、これらは平安朝朗詠史のなかでどのように位置付けられるものであろうか。

我が国の朗詠史研究の画期的な成果である青柳隆志『日本朗詠史 研究篇・年表篇』(笠間書院、一九九九年)に学びつつ、そのことを考えていこう。第四章の1「朗詠常用曲の成立」に次のような論述がある。

平安朝の朗詠の記録を通覧すると、宴遊などにおける朗詠曲はきわめて限定されていて、全期間を通じて、ほぼ次の五曲に集約される。1「嘉辰令月」、2「東岸西岸之柳」、3「新豊酒色」、4「德是北辰」、5「隆周之昭王穆王」である

が、これを青柳氏は「朗詠常用曲」と呼ぶ。上述の「嘉辰令月」、「德是北辰」はこれに含まれているのであるが、これらどのような場で詠じられているかを見てみよう。

「嘉辰令月」は平安時代を通じて最多の七十五回を確認することができているが、その主な場としては、次のようなものがあった。

臨時客 正月二日あるいは三日に摂関大臣が親王や公卿を招いて行う饗宴。

皇族や上流貴族の産養、着袴、読書始めなどの生育儀礼における祝宴。

勸学院歩あゆみ 藤原氏の慶事に際して、藤原一門の大学寮別曹である勸学院の学生が連れ立って参賀する儀礼。

「德是北辰」は四十二回の朗詠の事例があるが、それが行われる場は「嘉辰令月」とほぼ同様である。

これらを踏まえて青柳氏は「同句（德是北辰）は帝徳を讃仰し、その千万年の長寿を祈る祝賀の句として「嘉辰令月」同様、あらゆる宴遊において用いられた著名なものである」（前掲『研究篇』一八〇頁）という。

一方、「厳粧金屋中」の朗詠はこの二曲とは対蹠的に、前述の大治五年の他は三例しか確認できないが、そのうちの

つは天承元年（一一三二）正月三日の関白藤原忠通による臨時客での朗詠である。この時は先の「嘉辰令月」「德是北辰」に加えて「東岸西岸之柳」も詠じられている。すなわち、「厳粧金屋中」もこれら「朗詠常用曲」と同じく上流貴族の宴遊において朗唱される曲であったと考えられる。

結びに

かねて詩作の場において朗詠がなされる資料を目にすることがあったので、平安時代の「作文における朗詠」として考えてみたのであるが、予想したほどの事例は見出せなかった。その限られた資料の下であるが、述べたことは次の諸点である。

朗詠された詩句まで明記するものは六例である。

その六例は詩宴の性格によって二つに分かれる。一つは尚歯会、吉祥院および北野聖廟作文で、これらは詩作の場として定例化している。これらの作文においては、その場に深い関連のある詩句が朗詠される。なお勸学会もこれに加えてよ

うと思われる。

もう一つは天皇（上皇）、上流貴族が主宰する詩宴で、主宰

者の発意により催される一回性のものである。ここでは、その場で詠出された秀句、あるいは宴遊における常用曲となっている詩句が詠じられている。²⁸⁾

注

- (1) 新潮日本古典集成、第七十六段。
- (2) 新釈漢文大系による。
- (3) 新訂増補国史大系による。
- (4) 大日本古記録による。
- (5) 新日本古典文学大系による。
- (6) この宴での二人の詠作が残る。匡衡の詩は『江吏部集』巻下、鳥部「雁」に二首がある。以言の詩は『作文大体』成實堂文庫本に連韻詩の例として引く。ただし作者名はなく、『本朝一人一首』(新日本古典文学大系443)は「無名氏」とするが、第三聯「朝隠山雲細帙巻、暮過林靄注文加」を『江談抄』巻四一〇五に以言の作として引く。
- (7) 和歌文学大系による。
- (8) 『古今著聞集』に類似の話がある。巻四一四〇「東北院の念仏の折、民部卿齊信、齊名が秀句を朗詠の事」(新潮日本古典集成)に次のようにある。藤原兼家が九月十三夜に東北院の念仏に出かけたおり、藤原齊信に朗詠をなすよう促した。そこで齊信は「極楽の尊を念ずる事一夜」云々の句を詠じた。これは紀齊名が勸学会で作った詩序の一聯であったが、「これは三月十五夜の事なり。九月十三夜に詠ぜられける、いかにとおほゆ」とある。秋と春との齟齬に不審を漏らしている。
- (9) 大日本古記録による。文中で〈 〉で括ったものは原文では双行注である。
- (10) 新訂増補国史大系による。
- (11) 「調」、底本は「謂」。校注日本文学大系本により改める。
- (12) 日本古典文学大系による。
- (13) 原文は柳澤良一『本朝麗藻詳注』(勉誠社、二〇二三年)により、訓読は私見による。
- (14) 和歌文学大系による。
- (15) 増補史料大成による。
- (16) 日本古典文学大系による。
- (17) 新日本古典文学大系による。
- (18) 拙編『日本詩紀拾遺』(吉川弘文館、二〇〇〇年)による。なお「蓬鬢商山」は従来、典拠未詳とされてきた(新潮日本古典集成本頭注)。
- (19) 拙稿「安和二年粟田殿尚歯会考」(『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館、一九九三年)。
- (20) 海野康男『今鏡全釈』(福武書店、一九八三年)による。
- (21) 新日本古典文学大系による。
- (22) 拙著『天台仏教と平安朝文人』(吉川弘文館、二〇〇二年)「勸学会」参照。
- (23) 拙稿「勸学会記」について(注19に同じ)参照。
- (24) 新訂増補国史大系『朝野群載』巻三「勸学会之記」。
- (25) 拙稿「嘉保の和歌尚歯会」(『平安朝漢文学史論考』勉誠出版、二〇一二年)。
- (26) 拙稿「尚歯会の系譜」(注25に同じ)。
- (27) もう一つの「公(君)は春秋に富む」は菅原道真詩の「君は春秋に富み臣は漸く老ゆ」を鳥羽上皇主宰の作文の時点における上皇(二十八歳)と藤原敦光自身(六十八歳)に擬しての詠唱であろう。
- (28) 1の藤原道長主宰の作文は少人数での私的な会と思われ、ここでは詩題に即した詩句が朗詠されている。

(こ)こう・あきお 成城大学元教授